平成 29 年度 8020 公募研究報告書（採択番号：17-1-02）
研究課題；幼児期からの歯周病予防におけるライフコース研究

研究者名：上木　耕一郎[1)]　平出　諒太[1)]　山縣　然太朗[2)]
所属：1)山梨大学大学院総合研究部医学域歯科口腔外科学講座
2)山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座

【背景・目的】

本研究では、1988 年より現在まで 25 年以上継続している妊娠届時からの出生コホート研究（母子保健銃弾調査）のデータに基づき、学齢期の歯周疾患に関する要因・実態を明らかにする。

2017 年度歯科健診において、咬合力・唾液成分のデータおよびデンタルプレスケール®（ジーシー）を用いることで、学齢期の口腔内状態の客観的指標を取得する。そのうえで、生涯を通じた歯周疾患予防のために学齢期から介入可能なプログラムの開発を行い、実際の介入を通して有効性を縦断的に検討することで、最終的には歯科口腔保健医療の向上を目的とする。

【対象と方法】

対象：2017 年度学校山梨県甲州市（旧塩山市）の中学 915 名を対象とした。歯科健診に参加した 894 名を最終的な分析対象とした。

1. 咬合力調査：咬合力の測定はデンタルプレスケール®（ジーシー）50H・タイプ R を使用し、測定方法に精通した歯科医師 5 名により測定した。測定に関しては、各人十分な説明および咬合練習を行い、咬合位を確認した上で測定開始した。
2. 唾液調査：唾液成分検査にはサリバリーマルチテスト®（ライオン）を用い測定した。

【結果】

1. 咬合力調査：咬合接触面積・咬合力いずれも正規分布をしていた。咬合接触面積・咬合力は、男女ともに増加傾向が認められた野に対し、平均圧は女子のみ減少傾向が認められた。いずれの測定値においても、有意差は認めないものの、女子の方が高い値が示された(咬合接触面積: P=0.25, 咬合力: P=0.1, 平均圧: P=0.07)。咬合力の左右分布に関しては、若干右側が高い値を示したが(52.4±7.6%)、有意差は認めなかった(P=0.1)。有効圧は 99.1±0.9%であった。
2. 唾液成分調査：いずれの値も、比較的低値が目立つが「酸性度」はやや高い値にまとまっている。成人の平均値 50 と比較すると、歯周疾患要因の「白血球」や「潜血」に比べ、齲蝕要因となる「むし歯菌」「酸性度」「緩衝能」の値が顕著に悪い値であった。学年が高いほど、健康度の高い値を示したが、「白血球」のみ学年間による差は認められなかった。

【結論】

中学生における、大規模な唾液成分調査・咬合力調査により、学齢期の口腔環境の現状および課題が明らかになった。今後は、身体データ等全身状態を考慮した詳細な比較検討を行い、子供の歯周疾患要因のさらなる解明を進めていく予定である